失われゆく式内社を求めて【第四回】 青年版国民栄誉賞〝人間力大賞〟受賞者 オキタリュウイチ

国の御魂（みたま）の所在（ゆくえ）
―延喜式内社・倭大国魂神社・倭大国敷神社二座

八百万の神々の御霊が影向する日本では、多種多様な性格の神様がいますが、国家という概念と結びついた大国魂神（おおくにたまのかみ）はそのなかでも非常にユニークであり、そこには日本の独自の思想が表れています。今回は、日本各地の大国魂神を祀る神社の中から、徳島の倭大国魂神社および倭大国敷神社の二座にスポットを当て、「国魂」の概念とその現代における意味を問います。

いま目の前にある大いなる危機

――オキタさんはなぜ延喜式内社はじめ、地域の古社に注目しているのでしょうか？

オキタ／実は私の本業は、経営的に伸び悩んでいる企業を復活させる仕事でして、各地の企業を訪問してはヒアリングを重ね、事業再生のための手段を探ってきました。その活動のなかで、各企業の問題点を導き出す作業がある総量に達したとき、それぞれの企業が抱える問題はその一社だけに帰属するものではなく、本質的な問題は根底の部分でつながっていると感じるようになりました。一方で、各地域の伝統や風習が失われている場面にたびたび直面し、その度に愕然としていたのです。企業の抱える問題は、地域そのものや、そこに存在する伝統とも深くつながりがあることを強く感じるようになりました。

　このような失われゆく日本文化の最も根底にあるものは何であろうと考えたところ、地域の中心でその地域の固有性を保持しつつ各要素の素となっているものが神社であることに、ある段階で気がつきました。神社が寂れたまま放置されているのに、表面的なことだけにとり組んでも本当の意味で日本が元気になるはずがない。つまり、企業や地域の表面的な現象をいくら個別に修復しても意味がなく、本質的な部分から立て直すには、神社という深層テーマに取り組む必要があると意識したのです。

――神社を調査するにあたり、ぶつかった問題は何ですか。

オキタ／多くの古社で先祖伝来の古物や古文献が日々失われてしまっている状況にまず直面しました。住民や氏子、宮司さんなどによると、終戦直後の昭和二十年代前半ごろに各神社の古物や古文献がものすごく大量に処分されるという「破棄の大ブーム」が起こったようなのです。価値のある古い文物のほとんどが、その頃に大量に処分されたようです。

　戦中から戦後にかけての時代状況を思い浮かべれば分かることですが、当時、戦争に負けたことは、すなわち国家神道の信頼の瓦解であり、途方もない絶望感がともなうものでした。そのような状況下から、戦後、神社に人が全く来ない状況が起こり、各地の宮司さんが貧窮する事態も起ったようです。

　そういう時代のムードもあり、まさにその頃、神社に代々伝わる品々が焼き芋を焼くために使われたり、風呂を炊くために使われていたのだそうです。まるで冗談のような話ですが……。

――古物や古文献が消滅すると、過去にさかのぼる手段は一切なくなってしまうのでしょうか。

オキタ／残されている手がかりとしては、口伝で残されたエピソードや古文書の引用文、一部残っている古文献の切れ端などを手がかりにするほかありません。そのような一部かろうじて残っているものを復旧しようとする活動も試みていますが、こちらもかなり困難な状況に直面しています。

　その昔は、家族間や地域間で重要なことが長老による口伝によって語り継がれ、地域の共同作業によって共通体験が育まれていましたが、近年では核家族化が進み、情報の交わし合いをする機会もなくなってしまいました。家族間や地域間で重要な話をすることもほとんど無くなり、先にお話した「記録」の消失とともに、「記憶」の消失も また同時に起こっているのです。

　ここ数年、延喜式内社をはじめとする古い神社への取材の際に、最後の情報をもつ老人が亡くなってしまった（五年前まで生きていたから五年前に来てくれれば……）というような場面にたびたび遭遇しています。この時期を逃してしまうと、わずかな手がかりさえも無くなってしまうでしょう。

――あらゆる手がかりが無くなってしまうと、どういう状況が起こるのでしょうか。

オキタ／私たちにとって重要なルーツにさかのぼる手がかりが無くなると、本質的なものを全て〝想像〟するしかない時代が訪れます。日本文化の細部がなくなり、あらゆるものが平坦になってしまうのです。たとえば、日本といえば「おもてなし」といわれる。なぜかというと、先日テレビで見たから（なぜか深い理由は分からない）というようなことになる。正月はたんなる余暇となり、各地

社名が刻まれた石碑が、延喜式内社の威厳を感じさせる。

延喜式内社 倭大國魂神社。

過去のエピソードは失われてしまったが、幟や提灯など、神社に伝わる古物を１点づつ確認し、面影を偲ぶ。本殿の奥から偶然見つかった宝刀が、現存する中では最も古いアイテムである。

倭大國魂神社を訪れ、宮司さん、氏子さんに取材するオキタ。

オキタリュウイチ　クリエイティブディレクター
昭和 51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで 17 億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

オキタ／自然はもともとあらゆる所与のものですが、国魂神は、人間が作った区分、都合上の生活区分を祀るものであり、非常に変わっています。たとえば、埴安姫（ハニヤスヒメ）は「土」、弥都波能売（ミツハノメ）は「水」の神格化ですが、国魂神という概念だけが、その領土区分の神格化なのです。たとえば、尾張、摂津といった地域には、尾張大国霊神、生国魂神という名のそれぞれの国魂神が存在しますが、そこもあくまでも人間の管理区分であるのに、神として祀られているのです。

　不動産の例でいえば、土地の上にある建物を代表しているのは氏神や自然神ですが、土地そのものを代表しているのが国魂神です。不動産には、土地のオーナーと建物のオーナーが居て、その協力関係で成り立っているわけですが、それと同じで、神々にも土地の神とその上にある表徴物の神が存在しているのです。

　千三百年前からそういう思想が浸透していたのは日本だけであり、本当に不思議なことです。別の言い方をすれば、氏神や自然神は、北欧や南米など、他国でも類似のパターンを確認できますが、

供物台の裏の神紋の幕を上げると、
そこに素木の本殿が垣間見える。

【式内社とは何か？】

式内社（延喜式内社）とは、延長５年（927年）にまとめられた『延喜式』の巻九・十に収められた「延喜式神名帳」に記載されている神社のことを指します。これらは、律令制のもと祭祀を司る神祇官から幣帛（神前への捧げ物）を受けとっていた神社であり、それゆえに非常に格式の高い神社であったと考えられます。式内社は、全国で2,861社3,132座あったと記録されます。古社の格式を知る上で、この「延喜式神名帳」の記述はとても重要な手掛かりになります。

倭大国魂神社宮司の二宮氏から情報を聞くオキタ。神社の由来に詳しい長老は、残念ながら数年前に他界していた。

「国魂の神」という不思議な概念

――延喜式内社が日本のルーツを探るための重要な手がかりであるとのことですが、その土地の記録や記憶と結びついている神様にはどんな種類があるのでしょうか？

オキタ／大きく分けて、三つのタイプが考えられます。一つは、その土地を開いた人物やその土地で活躍した人物、重要な役職を担った人物などを神として祀る「氏神」といわれるもの。二つ目は、自然環境や物質そのものが神様になる場合。これには、三輪山や大麻山のように、もともとあった自然が神になる場合と、草薙の剣のように神≒人間が作ったプロダクトが神になる場合の二パターンがあります。

　三つめはその「土地」そのものが神様になる国魂神（国魂の神）という概念です。これは非常に理解し難いものなのですが、この三つのなかで最もユニークであり、私は以前から多大な関心を寄せています。

――自然神を祀ることと、国魂神という概念は違うのですか？

国魂神という概念はとりわけ日本独特のものであり、他国にも類を見ないものであると考えられるのです。

倭国の「国魂」を祀る唯一の神社

――日本各地に国魂神を祀る神社があるそうですが、その中でも特に注目している神社はありますか。

オキタ／阿波（徳島）の倭大国魂神社に祀られている「倭大国魂神」は、『日本書紀』にまで出てくる有名な神なのですが、ほとんど興味をもたれず崇敬者が少なくて残念に思っています。ほかにも、奈良県の大和坐大国魂神社や淡路島にある大和大国魂神社などに、〝やまと〟という地名が冠されています。

　果たしてその中のどの神社がルーツに当たるのか、倭が引っ越して大和になったという説、逆に大和がおおもとであるという説など、盛んに議論されています。いまとなっては確固たる証拠はないのですが、徳島の美馬周辺に古墳時代より前の古墳の原型のようなかたちの石室が多々存在することや、奈良にある古墳周辺で徳島産の青石に非常に似たものが見つかっていることなど、とても気になる事実がいくつもあり、真相を追っているところです。

　いずれにしても、「倭」という文字が使われている神社は全国でこの一社のみであり、そのことが私にとっては最も惹かれる点なのです。

――何かしら手掛かりは無いのでしょうか。

オキタ／この倭大国魂神社からそう遠くない場所に、倭大国敷神社という神社がありまして、この二つの関係が何か重要なことを示唆しているのではないかという気がしています。

　祝詞に使われる用語で敷坐という言葉があります が、敷は「治める」という意味で、坐は尊敬語です。このことから推測すると、倭大国敷神社の「敷」という文字は、神がその場所を「統治する」という意味でしょう。つまりは、倭大国が治める」という意味であり、「倭大国魂神」がその区域を支配していた事実を社名が伝えているように思われます。加えて、「大国敷」という神社は日本に一社、唯一ここにしかありません。

――「倭大国魂神」とは、どんな神様なのでしょうか。

オキタ／『日本書紀』をひもとくと、ちょうど崇神天皇の御代に、天照大神と倭大国魂の二神を祀ったものの、二つの神のパワーが強すぎて、国勢が不安定になったため、渟名城入姫命があらためて祀ろうとしたが、やはり力が強大すぎて姫の髪が抜け痩せ細って衰弱し祀ることが出来なかった……　というエピソードが出てきます。

古社探訪バスツアーで、十数名を倭大國魂神社に案内した。（2015年２月頃）

鎮守の森には謎めいた古墳が存在する。年代は不明だが、石室の構造が日本最古であるという。

この一文から読み取れるのは、天照大神と比肩するほどのパワーのある神様であることと、祀り方によって国の情勢が揺らぐほどの祟り神でもあり、その存在そのものが〝国力〟に由来するということです。

〝国魂〟は令制が整えられて「国家」という概念が登場してから生まれたものであると考えられます。つまり、人間社会が整備された後に生まれた神が「国魂神」なのです。古代の人々は自分が生まれ住んでいる土地に霊性があると考えていましたが、その後の時代の人々は、新たな概念である「国土」にもまた霊性が内在していると思ったのでしょう。その霊威が国の興亡に深く関わると考えられたのです。

「国魂」を守ることの意味

――最後に、「国魂（くにたま）」という概念がまだよく分からないので教えてください。

オキタ／国家区分の象徴としての国魂神は各地に出現しましたが、各地で祀られた国魂神はその土地でしか存在できないものとして祀られました。各地の国魂神にはキャラクター設定があり、先ほどの『日本書紀』の記述のように、国魂神にもまた好き嫌いがあって、それに基づいて行動を起こします。強烈な性格をもつ存在として位置付けられているのです。国魂神のキャラはその土地そのものの強烈な個性なのかもしれません。

――「国魂」と通常の「御魂（みたま）」の本質的な違いとは何でしょうか。

同じ美馬市（旧美馬郡）の脇町に坐す倭大國敷神社。
同じく延喜式内社だが、境内は公園になっており、ジャングルジムが置かれている。

【神社の基本情報】
延喜式神名帳 阿波国美馬郡鎮座
式内社 倭大國魂神社（やまとおおくにたまじんじゃ）
所在地：徳島県美馬市美馬町重清字東宮上３
御祭神：倭大國魂命 大己貴命
式内社 倭大國敷神社（やまとおおくにしきじんじゃ）
所在地：徳島県美馬市脇町脇町字拝原 2404
御祭神：倭大國魂命 大國敷命

オキタ／「倭」という新たなコンセプトに「国魂」が宿り、倭大国魂神という全く斬新な神格が生まれたのです。このことは非常に画期的なことでした。なぜならば、実体のあるものだけでなく、人間の社会にある抽象概念であっても神威を帯びることが出来るわけですから。このような発想は非常にクリエイティブであり、未来においても新たな国魂神が生まれる可能性をはらんでいます。人類の長い歴史の中で、わりと最近になって考え出された超国家的なコンセプトにも、「国魂」が宿ることが大いにあり得る。たとえば、日本的感性で考えると「ＡＳＥＡＮ大国魂神社」とか、「ＥＵ大国魂神社」といったものが、誕生するかもしれない。

時代が変わっていくごとに国家という概念のあり方も、その領域も変わっていきます。国家を超えた営みが必要となり、超国家的なコンセプトが生まれている現代において、「国魂」は非常に理にかなっているといえるでしょう。

また同時に、「国魂」をないがしろにしたならば、地域再生も国土再生も実現しないと思いますね。国を大事に思うのであれば、私たちが立っている国の土地を祀る神を大事にしなければならない。日本人として足元から充実した生活を送りたいならば、その土地の神を掘り起こして明らかにすることが急務でしょう。

「国魂」は統治区分であり生活区分の御霊。古の人々が考えた「国魂」というアイデアの中には、私たちが帰属する土地に対してどう向き合うべきかという教示が込められているように思います。あなたの国の「国魂の神」はどういう神様か、そのことを問い、継承していくことが重要なのです。

インタビューより編集構成／石黒壮明